

日常の授業改善につながる校内授業研究の開発実践（その3）

Practice development of school lesson study
which leads to everyday lesson improvement (3)

西尾朋子*・石川英志**

NISHIO Tomoko and ISHIKAWA Hideshi

本研究は、校内授業研究の課題を、(1) 研究授業と日常の授業をどのようにつなぐか、(2) 教師間における世代を越えた協働性をどう育むか、(3) 外部者とどのように連携するか、という三つの方向で捉える。本稿及び次稿（予定）では、(2) の課題、すなわち授業づくりをめぐるベテラン教師と若い教師の世代継承的な協働性構築のための実践的な方策を提案し、それに基づく試行実践について報告する。

I 世代を越えた協働性を培う「学習する組織」の構築

教師はなぜ授業研究に取り組むのかについて先に次のように述べた。⁽¹⁾

「教師のサイドから考えると、教師としての自己実現に向かうプロセスとして校内授業研究は位置付けられる。自己のもつ授業力を発揮することこそ教師の本分であると、どの教師も少なからず意識している。…授業研究を通して、授業の在り方を考え、授業を通して何のために自分が存在するのかを自覚し、自らの力量を感じ取り、子どもの新しい見方や考え方を培っていくことに充実感をもてるからである。…すなわち、授業を通して、教師として生きる自分のアイデンティティを確認し、またその再構築を図ることができる。同僚と共に認め合い、鍛え合い、励まし合うことによって、教師としての自分の在り様に変化、向上していくことに喜びを感じる」。

そのために、校内授業研究をもっと日常的に展開できるものに変えていくことが必要だと述べた。日常の授業を大切にする教師こそ、教師としての専門的な力量を形成できる。日常の授業改善を絶えず意識しているからこそ、普段の授業の質が向上し、子どもの学力形成にもつながっていく。

しかし、教師がそうした志向性もちつつも、その能力を十分に発揮できているかと言えば、そうではないだろう。大きな要因として、教師の人間関係づくりの難しさが挙げられる。学校現場で個々の教師の能力を互いに受けとめ、認め合い、生かし合う人間関係が構築されているかどうかという問題である。これはなかなか難しいように思われる。学校現場では今、ベテラン教師と若い教師への年齢的な二極化が進んでいると言われている。実際、筆者（西尾）の勤務校恵那市立長島小学校（平成22年度当時）や同市内の学校でも、年齢構成上の二極化が進行し、特に小学校では顕著である。だから大抵の場合、小学校ではベテラン教師と若い教師はセットにされ、同学年所属になることが多い。

ベテランと呼ばれる教師を40歳以上、若い教師を勤務6年未満と仮定的に考えることにしよう。勤務校では、この仮定にしたがうと、教師28名のうち、ベテラン教師は17名、若い教師は5名である。この間の年齢層の教師が大変少なく、いかに二極化が進んでいるかがわかる。40歳前後になると、学年主任、教科主任、研究主任、生徒指導主事といったスクールリーダーとしての役割を務めることが多くなる。これまでは学級内部の仕事や校務分掌に応じて与えられる仕事を中心であったため、かりにうまくいかなくても不備があっても、学校全体に影響が及ぶことはなかった。しかし、ベテラン層になってくると、学年経営や学校経営に関わる役割が次第に増えてくる。したがって、仕事の進め方や内容が同僚の前にいつも提示されることになる。そこでは、仕事の進め方や内容を自分で考案し提

* 岐阜県教育委員会可茂教育事務所学校支援課充課長補佐（岐阜大学大学院教職実践開発専攻（教職大学院）平成22年度修了，前・恵那市立長島小学校教諭）

** 岐阜大学大学院教職実践開発専攻（教職大学院）

起するだけでなく、管理する役割も担うことになる。

一方、若い教師は同僚先輩達が構築してきた学校の既存のシステムに組み込まれて育っていく。若い教師は総じて状況や文脈に依存的であり、ベテランや年長の教師に対して受動的にならざるを得ない。ベテラン教師の考案し提起した仕事の内容や進め方に対して、疑問をもたず、もったとしても表明することもできず、指示された仕事を懸命に行う。自分の判断で動き、見通しをもち行動する余裕が少ないので、他の教師の動きに追随することが多くなり、仕事時間もかなり多くなる。一日が終わり、疲れた状態になるのが仕事の充実感だと自分を納得させ、帰宅後も明日の授業準備を黙々と行う。

ベテラン教師と若い教師への二極化が進行していると前述したが、単に年齢的なことではなく、仕事に関して「考える教師」と「こなす教師」といった二極化も進行しているのではないか。もちろん、ベテランというモデルの動きを日常的に観察し、その技術を自らの目標として懸命に吸収しようとするのは大きな意味がある。ベテラン教師の使いこなす洗練した技術を介して、先輩の教師のものの見方や考え方を吸収することができる。しかし、そうして吸収したものと自分の見方や考え方を擦り合わせる時間や余裕がないのが実状である。そう考えると、ベテラン教師が若い教師を育てるときに、単に技術伝達だけで彼らの能力を高めていけるのかどうかは疑問のあるところである。新しいスキルが身に付くように教えるだけでなく、若い教師が日頃考え、悩んでいること等に丁寧に対応し、彼らのものの見方や考え方の面白さや不十分さを受けとめ、一緒に今後の見通しを考え、実際に活動し、実践知を獲得していくことこそ必要であろう。若い教師は、自分もできるようになりたい、役に立ちたいと願いつつも、いったい自分は何をしたいのか何を望んでいるのかを立ち止まって考える間もなく、同僚先輩との関係で言われるままにこなすという形で受け身に動いていく。しかし、仕事のスタンスは日々の仕事以外も含めたそのひとの物事の考え方、思考のプロセスと密接にリンクしており、技術が身についたとしても、それを支える見方や考え方が醸成されなければ、教師としての力量形成にはつながらない。若い教師にとって、同僚先輩が積み上げてきた授業技術を習得するだけでなく、その技術が生み出されてきた背景やプロセスを考え、またその技術を実際に適用して気付いたことに基づく新たな工夫を位置付ける、そういった営みが大切であろう。

そうした意識のもとに、現在の校内授業研究体制に目を向けると、若い教師を育てる仕組みがそこに位置付けているだろうか。若い教師が自分の手の届く範囲で色々工夫し改善を図ろうとする領域を「ご指導」の名のもとに枠にはめ込み、あえて自分で試行する機会を奪っていないだろうか。こなす教師を脱皮しようと、自ら試行錯誤し考える機会と時間を設定しているだろうか。学校文化としての協働性は、効率性の視点だけで教師を捉えるのをおしとどめ、むしろその可能性を見つけ、互いに啓発し合い、相互成長することを重視してきた。それは、同世代間だけでなく、異世代間にもあてはまる。若い教師が育つには、世代を越えた協働性が鍵となるであろう。教師の省察を基盤とする授業研究の実践が、近年注目されているが、これまで授業研究の場を通じてそうした授業研究の原理や方法はベテラン教師から若い教師へと受け継がれてきたはずなのである。言い換えれば、脈々と受け継がれてきたはずの教師の協働による授業研究文化が、多忙化と個業化の波の中で危うくなっているとも言える。岐阜県では、今後10年で教職経験年数10年以下の教員が教員全体の半数近くを占めると予測される中で、世代を越えた協働に基づく授業研究文化の世代間継承は喫緊の課題であると受け止めなければならない。

ここで、教師の力量形成のための重要な営みとしての省察をめぐって、佐古秀一が同僚教師との協働の必要性を次のように述べていることに着目したい。⁽²⁾

「省察の限界は、『自己』に閉じた思考や分析に偏ったものになることであって、ここに他者の介入や支援を組み込むことが必要になる。つまり、『ある教師の省察に他の教師が関与し、その問題を共有し、改革・改善への方策を考察し、それを集団的に遂行し評価する過程』＝教師間のかかわり(協働)の過程が必要になる。この協働の過程の必要性は、第1には、他の教師からの情報提供が、

教師自身の省察を深め支援する契機となることである。『自己』省察の枠にとどまらず、他の教師との関与と支援の中で省察がなされることによって省察の深化が期待できることである。さらに第2には、教師が認識した問題を起点として、これを当該教師の問題に閉じるのではなく、教師集団、学校組織レベルの問題へと波及させ、集団・組織レベルでの問題共有と相互関与を実現することが期待されるからである」。

省察をモノログとして自分の中で閉じた回路として展開するのではなく、同僚との協働において行うことの意義が2点語られているが、それはベテラン教師と若い教師の関係にもあてはまるべきものだろう。たしかに、若い教師は授業技術や実践知の点でベテランに及ばないだろう。しかし、若い教師の最新知識を受信し更新するアンテナや自分の思考枠組を問い直し再構築する柔軟な感受性は、実践のパターン化や日常のルーティンの上に安定しているベテランのそれらを凌ぐ面があることも確かである。それだけに、若手、ベテランを問わず、一人で省察するだけでなく、同僚と協働して省察することが重要である。

それでは、具体的にどのような場を設定して、ベテラン教師と若い教師をつないでいくとよいかを次に述べたい。筆者（西尾）は平成22年度校務分掌として研究推進コーディネーターという役割を担い、校内研究推進に関する積極的な提案を行い、研究主任や研究組織からの相談に乗ったり助言したりする役割をもつ。研究推進が手前味噌のものとなったり、停滞やマンネリ化のないように他校の実践や先行研究等から学んだことを紹介し、常に新しい発想や情報を取り入れることの必要性から設定された。教職大学院で学んできたことを勤務校の学校現場で活かしていこうとする勤務校のスタンスの表れとも捉え、その立場から積極的に発想・立案し、学校現場に浸透させていくことが求められていると理解した。そこで早速、以下の4点にわたって取り組むこととした。その取組を通して、個々の教師の力量や個性を互いに受容し、認め合い、生かし合う人間関係の構築がなされて「学習する組織」が形成され、その元でこなす教師から考える教師への転換が図られていくと考えたのであった。

II 「学習する組織」構築のための四つの方策

1 授業研究会におけるワークショップの導入

ワークショップとは、グループ討議で行われる合議形成の方法である。それぞれの教師のもつ断片的な知識、経験、能力等を集結させて課題解決に向かう。従来の全校授業研究会は、あらかじめ設定された視点を意識して話し合うことによって、短時間で効率的に一定の結論に到達することを意図していた。したがって、会議の最後には、ベテラン教師や外部指導者が設定された視点に応じた結論となるものを提示し、方向付けをしてきた。しかし、これだけだと若い教師が省察したことの多くは捨象され、結局はベテラン教師の見解に帰着することになりやすい。

そこで、全校授業研究会の中にグループ討議としてのワークショップを位置付ける。ワークショップは、直面する課題に対する具体的で現実的な方策を考案することを目的とするため、正当なる一つの答えを出す必要はなく、合意形成は一人ひとりの納得の具合に任されている。したがって、個々の教師が自分の現在の立場や状況から思考し表現し議論する活動が相対的により大きな位置を占めてくる。個々の教師が自分の抱える問題や悩みとつなげて、研究授業をめぐって語り、自分の日常の授業を照らし出す作業を展開することになる。そして、他の教師の省察を自分のそれと比べたりする。こうして個々人のレベルで納得することを求めていく。つまり、ワークショップの推進が個々の教師の成長発達に結びついていくと考えたのである。

2 ラウンドテーブルの推進

日常的に「ラウンドテーブル」を行う。ここに言う「ラウンドテーブル」とは、都合のつく少人数

で短時間集まって、個々の問題やその解決をめぐる談話し、情報交換する自発的な営みのことを指す。筆者(西尾)は平成22年2月に福井大学教職大学院主催「福井大学ラウンドテーブル2010」に参加し提案する機会に恵まれ、その場に集まった数人の教師との自由な語りからこのような仕掛けを普段学校の中に位置付けることの重要性を実感した。

学校現場におけるラウンドテーブルとは、授業前後、休み時間、放課後といった日常の「隙間の時間」を使って行うものとなる。僅かな時間にせよ、自発的な対話・談話の場を意識的に設定することによって、世代を越えた相互交流の促進が期される。そこでは、省察を軸にして子どもの生活や学びの様々な姿を中心に語り合うプロセスで、若い教師だけでなく、ベテランの教師にも多くの「気づき」「見つけ」が生まれることが重要である。また、授業をめぐる、相互に専門性を磨き合う対話が生まれ、「こなす教師」から「気付く教師」「考える教師」への脱却を図ることを意図している。

3 授業研究ツールの開発

「ラウンドテーブル」の場を日常的に設定すると共に、その短い時間に意味ある話し合いを展開し、授業をより深くより豊かに捉えることを支えるツールを共同開発することが重要だと考えた。授業をめぐる事前・事後に話し合う場合、学習指導案がそうしたツールの役割を務めることが多い。授業を観察している時でも、学習指導案の展開段階に書かれた内容と、実際の授業の流れを比べる視点で自分が観察していることに気付く。座席表(机列表)もそうしたツールの一つであるが、事後の研究会で共通の土台として生かしているとは言い難い。

授業観察でのこうしたツールに関して、先述の福井大学ラウンドテーブルの同じテーブルについて他県の教師達との情報交換において、事前・事後の交流方法やそこで活用する授業観察シートの開発とその取組のプロセスについて知ることができた。例えば、授業と向き合う共通の窓口として授業観察シート(視点群)を設定し、実際に使用し、さらにそれをめぐる対話・談話をする中で、目のつけどころの差異や共通性、その背後にある授業観や子ども観の差異や共通性が次第に相互に見えてきて、その関連性を考え合うことが教師の相互的な成長発達につながっていくという報告であった。そこで、同僚と共にいくつかのツール(「指導案チェックシート」、「授業観察シート」、「思考の複線シート」)の作成に取り組むことにした。

4 リフレクション・ファイルの作成

日常の授業において、板書、子どものノート、使用プリント、掲示物、座席表(机列表)等、授業の記録として残されるものは数多くある。しかし、これらが普段の授業改善に生かされているかと言えば、なかなか難しい。子どもの学びに関する資料は、学習の定着度やつまづきを把握した後に、子どもに返却されたり、板書や掲示物はその役目を終えたら短期間に片付けられてしまうからである。

いうまでもなく、記録となったのは、子どもの学びの足跡であり、教師の指導の足跡である。だから、これらをもとに対話や談話をすると、子どもの多様な側面をもった具体的な姿が次第に見えてくる。子どもを具体的に捉える眼をもつことは、授業をより深く考えることに直結する。だから、自分を取り組んだ授業に関する記録を日々残していくことは、自分の授業に対する省察を促し、授業改善につながる格好の手だてとなる。さらに、同僚同士でそれをシェアリングすることによって、他の教師の日々の実践の取組がわかるだけでなく、個人の省察がより深まっていく。教師の力量向上、授業改善のためには、記録する営みは不可欠である。

岩手県立総合教育センターによって作成された「校内授業研究の進め方ガイドブック」に、「授業力アップ・ポートフォリオ」の実践が紹介されている。^⑧これは、教師が「自己課題」や「課題解決のための方策」を設定し、それに基づいて日常の実践のファイリングを行うものである。本研究の文脈に即してどのような示唆を得られるかと言えば、授業に関する資料を何でもひたすら保存し蓄積し

ていくファイリングというのではなく、自分の授業づくりや子ども理解に関する問題意識に基づいて焦点を絞ったファイリングを行うということである。自分の実践に対する省察の方向や対象に関わって、次の実践でどう引き続いて取り組んだか、その内容を示すものをとじていくファイリングの仕方である。このファイルを「リフレクション・ファイル」と命名した。

これまで述べてきた四つの方策をまとめると、下図のようになる。

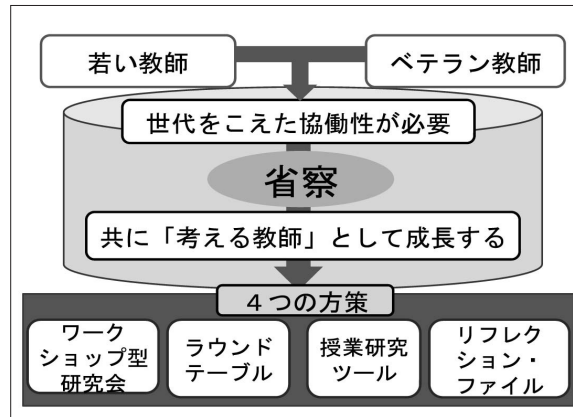


図1 教師の成長発達と世代継承を支える四つの方策

III 四つの方策の基本的な考え方と具体的実践

四つの方策のうち「授業研究会におけるワークショップの導入」に関しては、恵那市立長島小学校での具体的な実践を通して、その意義や課題を既に考察している⁽⁴⁾。よって、ワークショップに関しては次の「ラウンドテーブル」とのつながりに言及することにとどめて、他の三つの方策を中心に取り上げる。⁽⁵⁾

1 ワークショップからラウンドテーブルへと継続する教師の学び

全校授業研究会とは、一人ひとりの教師が次につながる学びを経験したり、その見通しを得るための一つのステップであると捉えたい。すなわち、全校授業研究会という場で、同じ事例を元にして、

その場に臨む教師達が語り合うことを通して、昨日の自分と少し違う成長した自分を発見できるようにすることが求められるのであり、その仕掛けとしてワークショップを位置付けたい。

よって、ワークショップで話し合っただけを日常の自分の実践に引き寄せてその改善や充実にいかにつなげることができたかを同僚と共に確かめる場が重要であり、その場がラウンドテーブルだと考える。ラウンドテーブルという日常的な仕掛けを設定することによって、ワークショップ型研究会の学びを補完する役割を果たす、ワークショップの時間で自己完結をしないで、そこでの気づきや発見を継続させて追求することができるのである。

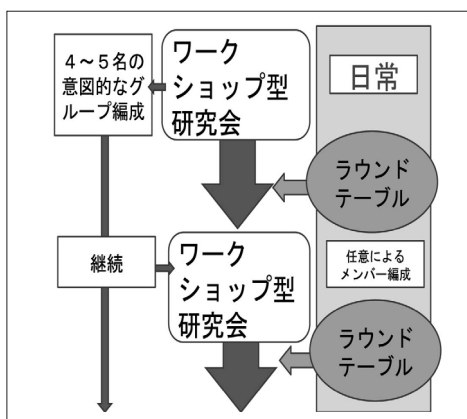


図2 ワークショップとラウンドテーブルのつながり

2 ラウンドテーブル

(1) ラウンドテーブルの特性

ラウンドテーブルとは、情報・意見交換のために少人数で自発的に集まって談話する営みを意味し

ているが、ある公式な場で協議し学んだ内容をその場に臨んだ個々人が自分の状況や立場に引き寄せて実践を行い、その実践の意味や課題を発見・確認し、さらに次への学びの見通しを得るための非公式な集まりの場であると言ってよいだろう。前稿で「実践コミュニティ」について言及したが⁶⁾、実践コミュニティとは、あるテーマに対して関心をもつ人々で構成されるインフォーマルな集団を意味し、共通の専門的なスキルを深めるために、熱意や献身をたもちながら、非公式に結び付いた人々の集まりのことである。校内授業研究の文脈に引き寄せるならば、ラウンドテーブルこそ、この実践コミュニティに該当すると捉えたい。前稿では、算数部会というフォーマルな組織からスタートしたとは言え、問題や関心の共有の可能性を探る「潜在」の段階から、その関与と交流を図る中で「結託」を深め、自発的な実践コミュニティとしての側面を発達させていく様相を記した。学校現場では、制度化されたコミュニティの中に実践コミュニティ的な側面を位置付ける方向と、学校組織の隙間に実践コミュニティを組み込む方向という二つが考えられようが、前稿では前者の方向での実践報告を行った。本稿では後者の方向を模索した実践報告を行う。ラウンドテーブルの基本は後者の方向であろう。ラウンドテーブルの特徴を考える上で、高間邦男が著書『学習する組織』で挙げる話し合いの五つのパターンを紹介したい。⁷⁾

◆井戸端会議

人と合わせることで、話の内容はジャッジされなくて済む安心感のある話し合いのことを指す。

◆クイックフィックス

問題は何か、または何を實現すべきかという共通理解が前提にある場合の話し合いを指す。状況の把握や事実の確認がされるとすぐにどのようなアクションをとるのが決定される。ここでは参加メンバーがもつ経験知や枠組みが提示され、より権威や知識経験のある人の意見が採用される。

◆問題解決

問題の原因を探求し、解決策を出し合い、実行案の合意形成を図る話し合いを指す。短い時間で効率よく結論を出すことが重要視される。事前に十分準備を行い、議題を明確にし、参加者の役割分担や発表者による明確なプレゼンを通して、全員参画の合意形成がされる。利害が対立すると話がまとまらない。

◆共感的話し合い

既成の価値観や枠組みと、新しいものとの融合を目指す話し合いを指す。個人の経験を語り合い理解し合うことで体験を共有する。また、組織のメンバーの多様性を互いに受容することで、オープンに誰でも意見を言えて、何を言ってもジャッジされない。

◆生成的なダイアログ

参加者同士が集団的な思考を行うことで新しい知識を創造する話し合いを指す。お互いが意味や経験を共有しながら探求するプロセスを目指す。多様な気づきを出し合い、テーマを決めないで集まった人たちの関心の流れにまかせる。集団が一つの脳を共有するような感じを大切にす。

学校現場でのラウンドテーブルとは、授業前後、休み時間、放課後といった僅かな「隙間の時間」を使って行う日常的な話し合いの場がそれに相当すると言えるだろう。忙しい学校現場では、この時間は大変貴重であり、10分程度の短い時間であっても、積み重なれば大きな意味をもつ。ラウンドテーブルに参加するか否かはあくまで自発的なものであり、強制されるものではない。ある教師が自分の課題をもって、他の教師に働きかけることで自然と生まれる小集団なのである。したがって、話し合う内容は個人の課題意識から出発し、自分の向き合う課題にお互いに気楽に遠慮なくコミットメントし、そこに生まれた「気づき」や「見つけ」を共有しようとする。上記の五つのパターンに関連付けるならば、「共感的話し合い」、「生成的なダイアログ」を包括するものとしてラウンドテーブルを考えたい。ベテラン教師で発信力のある教師がこれまでの経験を元にして、「こうすればうまくいく」、「この方法が一番有効である」と決着させたりするのではなく、世代を越えてお互いの考えに触発され、自分の考えを相対化し、「それならこうすればいいのではないか」、「そういう考えもあったのか」、

「このようにやってみよう」と新しい気付きを生み出し、自分が納得できるものをそれぞれに模索する営みである。つまり、共感から生成へのプロセスを経る中で、自分だったらどうするか、どう考えるかを意識し話し合うことで、従来の自分から新しい自分へと更新されていく喜びを共有できる営みでありたいのである。以上の考えから、「ラウンドテーブル」の特性を次のようにまとめておきたい。

- ・「共感」を軸にして、お互いの気付きや見つけの共有を目指す。
- ・一人ひとりの気付きや見つけが他の教師の思考に働きかけて、その教師に新しい気付きや考えの「生成」をもたらす。
- ・「共感」から「生成」へのプロセスを経る中で、教師の新しい気付きや考えがいつも共有化され、新たな方法が提起され、授業研究の活性化を準備するものとなる。

(2) ラウンドテーブルを取り入れた日常的な実践

恵那市立長島小学校では所属学年や経験年数にとらわれることなく、対等の立場で意見を交流してきた。一人の教師の課題意識から出発し、周りが自然と傾聴し、集まり、自分の専門教科の垣根を越えて、授業に関わる様々なことを話し合っていく。例えば、次のような場面を日常的に展開してきた。

A. 授業後の休憩時間に、教室で板書や子どものノートを指し示して、隣の学級の教師と語り合うことを大切にしてきた。本時を終えて気付いたことをすぐに交流し、よりよい方法を話し合い、隣の学級の次の授業で活かそうと試みる。子どもがどのような考え方で課題を解決しようとしたか、教師はどのように振舞ったのか、授業計画はうまくいったのか、練習問題の定着はどうかと、子どもの行為の意味や背景を読み解きながら、教師がよりよい授業案をもって次の授業に臨んでいけるように、成功も失敗も互いに共有しようとする。

B. 放課後等に、休憩室で今日の子どもの様子や授業の悩みについて話し合う姿を大切にしてきた。例えば、宿題が毎日全員提出できている学級はどこにもなく、どの教師も対応に悩んでいる。提出できない子はどのような性質や環境をもつ子なのか、昨年度はどうであったか、どのような指導をしていくと有効かと、互いの考えを交流する。その際に、自分の学級のある子どもと実態を重ね合わせたりしながら、よりよい方法を模索する。次の日には「どうだった?」と教師相互が声をかけ合い、再び子どもの様子を交流し合う。早急に解決を求めるのではなく、自分の指導や実践を話すことが重要である。至らなさを共有することで教師自身が心の安定を図りながら、それでも子どものためにできることを一生懸命に考えることに意味がある。「自分だけが悩んでいるのではない」、「自分の困り感を共有してもらえた」という安心感は年齢を越えて教師相互の結びつきを強める。

C. 放課後の職員室に、若い教師が開発作成したワークシートをめぐる集まる。若い教師はパソコン等を駆使し、きれいで分かりやすい教材の作成技術を体得している。パソコンの画面を覗き込み、教科書を傍らに置き、ベテラン教師が意見を述べる。出来上がったワークシートを印刷し、共に明日の授業に使ってみようと言う同学年の教師がいる。また、子どもの発達段階に応じたものに編集できるかどうかと尋ねる他学年の教師もいる。次の日の放課後、そのワークシートの効果をめぐって再び集まる。

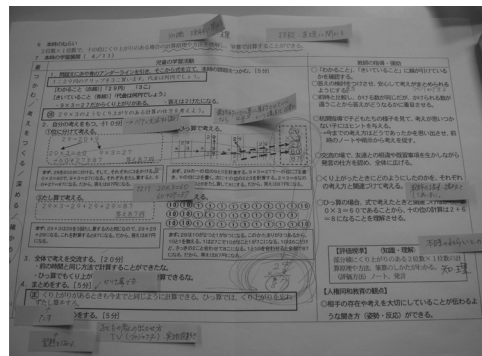
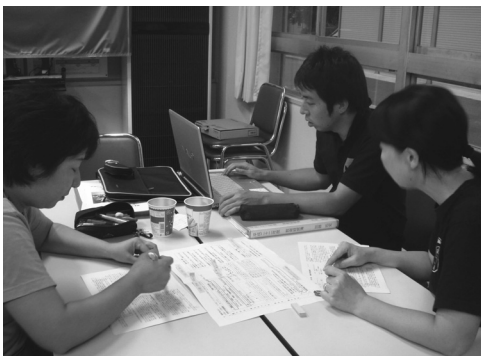
D. 授業展開案と一緒に考える時、付箋を使って、ブレインストーミング法（カードBS法）を取り入れたラウンドテーブルを行い、短時間で参加者から多くの気付きやアイデアを得ることができる方法として活用している。紙面を拡大した授業展開案について気付いたことを各自が付箋に書き、該当する場所に貼っていく。一緒に行くこともあれば、各自で時間を見つけて行うこともある。例えば、展開案の途中で「この場面では、先生はどのような言葉で発言を促すか」、「ペア活動を仕組んでいるが、うまくできないペアに対してこのような手だてをうったらどうか」と自分の気付きやアイデアを付箋に記して貼っていく。その付箋に記された内容を読んだ他の同僚は自分の気付きをさらに付け加える形で付箋に記し、重ねていくという作業を繰り返す。付箋には簡単に自分の名前を記しておく。名前が分かれば、その教師と直接話したり、付け加えられた付箋を読んだ他の教師も参加して、そこ

に話し合いが生まれる。授業者を囲み、授業をめぐる談話が日常的・継続的に展開する。

こうしたラウンドテーブルは、授業者にとって次のメリットがある。

- ・同僚から様々な見方や考え方を吸収し、自分の考えと照らし合わせることによって、自分をもっとも納得のいくものを指導展開案に反映させることができる。
- ・授業者としての孤立感がなく、授業に気楽に臨むことができる。
- ・貼られた付箋を見て、疑問に思うことやもっと知りたいことを直接同僚に聞くことができる。それでは他の教師にとってはどうか。
- ・授業者に対するコミットメントを確実に残る形で付箋に記すことから、授業者の授業に対して傍観者的な立場では済まなくなり、参画意識が高まりやすい。
- ・他の同僚のものの見方や考え方に触れ、自分のそれと比べることができる。
- ・リラックスして意見を交流するため、自分の感じたまま思ったままを表出しやすい。

授業案検討以外でも、学年で検討したい事項や教科部会で考えたいこと等に関して、付箋を使って、掲示された提案文書に貼りつけ、重ね、分類する方法は活用できる。その日に決着をつけようというのではなく、何日かかけて検討していくことで、学びが深まり、よりよい考えが生まれてくる。



このような形でのラウンドテーブルの日常化が定着するまでに、筆者（西尾）が研推コーディネーターとしてどんなことを意図的に行ってきたかを若干述べておく。教師間で授業研究を意識した視点が共有され、温かいコミュニケーションに基づく関係性が醸成されるためには、普段から教師相互をつなぐ機会を増やすことが大切である。そこで、積極的に授業を参観し、その教師の授業の「よさ」を見つけ、そのよさをきっかけとして、会話を進め、促すようにした。授業のよさが、教師のどのような構えから出現しているか、そのために準備されたことは何か、その準備が子どもの発言や行動にどのように作用したか等を自分なりに読み取り、その教師に伝えるようにした。その教師は授業で工夫したことや心に残った子どもの様子等を語るうちに、自分を次第に開いていくことができる。そこから、授業技術や子ども観を交流するラウンドテーブルを展開したのである。ある教師のよさを他の教師に伝え、一緒に話を聞く機会を作ったり、若い教師が質問してくることにに対して「〇〇先生だったらどうする？」とベテラン教師からアドバイスを引き出したりするように努めた。このように教師と教師をつなぐ役割を受け持つようにして、日常の授業をめぐる認め励まし合える人間関係の形成を意識的に行うようにした。

(3) ラウンドテーブルの課題と次につながる可能性

このような取組を日常的に可能にするには、「隙間の時間」がどこにあるかを共同でチェックして重視することが前提となる。学校の多忙化は放課後の僅かな時間さえ奪いがちである。しかし、教師が多忙にも関わらず、コミュニケーションを求めていることは、夜遅くまで残って仕事をしていることから推察できる。仕事の合間に、学級の子ども、校務分掌、自分の家庭等について、必ず雑談を交えているからである。仕事の達成と同僚とのコミュニケーションがセットになって、教師のモチベー

ションを継続させているとあってよいだろう。こう考えると、ラウンドテーブルは教師の仕事を活活化させることにつながっていることがわかる。ラウンドテーブルを日常的に行える状況を維持していかなければならない。また、全校研究会におけるワークショップとの関連性でいえば、ワークショップに向けての準備、ワークショップの場で話し合われた後の次の授業に向けての具体的な取組について打ち合わせる場としてラウンドテーブルは機能している。「ほんのちょっとした仕事」、「考えるまでもなくできる作業」だとベテラン教師が考えることでも若い教師は悩み、試行錯誤を繰り返している。その過程を同僚として共に歩む中で、ベテラン教師から若い教師へと、授業の見方や考え方、指導技法等が伝えられていく。短い時間のラウンドテーブルの積み重ねが若い教師の成長発達を支えていく。

ラウンドテーブルの場で効果的な話し合いを展開するには、授業をより深く捉えるためのツールの共有が大切であろう。また、会話という音声言語だけではせっかく話し合ったこともじきに忘れてしまう恐れがある。そのため、話し合いの足がかりになるもの、話し合った形跡が可視化できるものを共有することが話し合いを深化させ継続させていくのではないかと考えた。そこで、ワークショップやラウンドテーブルの働きを補完する一つの方法としての授業研究ツールをどう開発してきたかについて次に述べていきたい。

3 授業研究ツール

授業について同僚と話し合う際に、学習指導案を中心に据えることが多い。同僚の授業を観察するときには、学習指導案を事前に読み、展開部に書かれた「ねらい」、「子どもの学習活動」、「教師の指導・援助」、「留意点」の文言と、実際の授業の流れを比べながら見ている。そして、気付いたことを学習指導案の空きスペースにメモしたりする。子どもの座席表（机列表）が準備されている場合、子どもの発言内容や気付いたことを書き込む。1時間の授業の参観を終えると、そのメモは結構な量となる。しかし、授業後の研究会協議でこれらのメモが十分生かされることは少ない。記録担当係の教師によって綴られた速記録もあまり活用されていないのが現状である。自分が学習指導案等に基づいたメモと、実際の子どもの言動を記した速記録とが果たしてどうつながっているかを探すだけで時間が過ぎてしまう。また、研究会協議では、メモした子ども達の発言内容から思考の筋道やその背景、相互のつながりを明らかにするよりも、教師の取る手だてに焦点を当てて、より適切な手だてを探ることに重点を置く傾向があるので、直接にメモが生きてこないということもある。

そこで、授業の背景にある授業者の願いや主張がよくわかり、そのための手だてが端的に書かれたもの、そして授業者に寄り添って授業を観察し、気付いたことを記入できるもの、そのようなシートがあれば、参観者が傍観者的にならず、授業者の願いに応じて研究授業に臨めるのではないかと、協議の焦点を絞れるのではないかと考え、シート作成に着手した。しかしその途中で、こちらで作成したものをお仕着せのように配布するのではなく、ラウンドテーブルの場で同僚の意見を聞いて、このようなツールを作成していくプロセスそのものに意味があるのではないかと考えるに至った。自分たちが使うツールを自分たちの手で作成し、それを使用し、それを元に談話をする。並行してツールの改良についても話し合えばよい。早速、ラウンドテーブルを通して、いくつかのツールを作ることに取り組むことにした。こうして平成22年度に開発して、実際に使用してきた「指導案チェックシート」、「授業観察シート」、そして考案中の「思考の複線シート」について、次に述べる。

(1) 授業研究ツールの特性と三つのシートの活用

授業研究ツールは、短時間で密度の濃い話し合いを展開し、お互いの授業をより深く理解するための手段として位置付けたい。そのツールを通して、同僚の授業をより深く理解することによって、自分自身の授業づくりの取組に活かせるものとしたい。ツールの特性として、次の三つを想定する。

- 同僚の授業に対する自分の気付きや見つけを具体的に「書く」営みは、自分自身の子ども観や授業観とあらためて向き合うことにつながる。
- 同僚教師の実践から得られた示唆やヒントを目に見える形にすることは、自分の授業づくりの課題の解決に結びつけることができる。
- 書いたものを同僚とシェアリングすることによって、学んだことを交流・共有できる。

このような特性をもつシートとして、「指導案チェックシート」、「授業観察シート」、「思考の複線シート」の三つを構想した。その概略を記しておきたい。

「指導案チェックシート」は、授業者が作成した学習指導案を複数人で検討していく際に、学習指導案の内容や構造に落ちや問題がないかどうかを点検する手がかりとなる指針群を記したものである。このシートの活用によって期待されるものとしては、次のような点が挙げられよう。

- 授業内容をめぐって協議する際に、共通の窓口がもてるので、より深い検討に踏み出せる。
- 授業改善における技術的な側面を向上させる手だてとして活用できる。
- 話し合いを効率的に展開することができるので、時間的な負担が軽減される。

「授業観察シート」は、先述の福井大学ラウンドテーブルで、同じテーブルについて相互交流する機会に恵まれた宇都宮大学教育学部附属中学校がこれまで作成し活用しているものにヒントを得て作成したものである。授業を観察する際に、参観者が自分の気付きを書き込んでいくシートであり、このシートの活用によって期待されるものとして、次のような点が挙げられよう。

- 授業者から引き出した授業の見所（授業者が参観者に注目してほしいところ）を共有化できる。
- シートが参観者の足場となって、研究会で何をめぐって話し合うのか明確になる。
- 同じシートをもとに話し合うので、話題が収斂し、参観者の個々の思考がとぎれずに話し合いが展開され、内容的に発展する。

「思考の複線シート」は、「指導案チェックシート」の特性を補完するものである。事前検討では、教師の授業技術的な面だけをクローズアップするのではなく、教師の働きかけを受けて、子どもの思考や行動がどのように動いていくかを考え合うことが重要である。そこで、授業の展開案に沿って、複数の子ども達の考えの道筋、その交わりを記していけるものがあるとよいと考え、このシートを考案した。このシートの活用によって期待されることとして、

- 子ども思考や行動を予測して書くことで、授業者も参観者も授業展開を具体的にイメージできる。
- 授業における子どもの言動を具体的に予測することで、個に対応した準備を周到に行える。
- 授業そのものの中で、子どもの言動を適切に読み取って対応する力が形成される。

これら三つのシートは、「考える教師」になるための方策であるとともに、校内授業研究において日常的なサイクルのなかで考え続けていく際に効果を発揮するものとして位置付けられよう。具体的には下図のようになる。

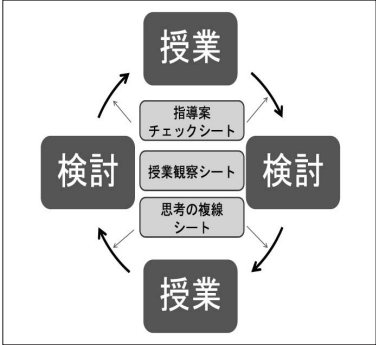


図3 日常のサイクルと三つのシートの活用

次に三つのシートの開発と活用について、長島小学校の実践をもとに述べる。

(2) 指導案チェックシートの開発と活用

学習指導案は地域や学校によって形式が異なるが、そこに記される内容項目にはおよそ次のような共通点が見られる。単元名、指導の立場（教材解釈・子どもの実態・研究内容との関わり）、単元目標、単元指導計画、評価規準、本時の目標（本時の位置）、本時の展開

これらを「教材解釈」、「単元指導計画」、「一単位時間」、「その他」に分け、その四項目にわたって、指導案を検討する際の視点を考えることにした。私達はいつも何を考えて指導案を作成したらよいかをめぐって、ラウンドテーブルで意見を出し合い、複数回にわたって行ってきた結果、次の23項目が精選された。

指導案チェックシート 名前（ ）

項目		内 容	チェック	
教材の解釈	1	教材の研究や理解は十分である。		
	2	単元を見通したねらいと、願う子どもの姿が明確である。		
	3	子どもの学習上の成果や課題・つまづき等を把握し、わかりやすく示している。		
単元指導計画	4	単元の目標は教科の本質との関係からみて適切である。		
	5	単元の目標の達成に向けて、子どもの意識が連続する指導計画となっている。		
	6	一単位時間のねらいと主な学習活動、評価規準が明記されている。		
	7	評価規準や評価方法が一単位時間のねらいとつながり、適切である。		
	8	多様な学習活動が工夫されている。		
一単位時間	9	本時のねらいは具体的に書かれている。		
	10	課題を生み出すための提示の仕方に工夫がある。		
	11	課題は、本時の目標を具現化するために有効なものとなっている。		
	12	子どもから様々な考えを引き出す発問や問いかけがある。		
	13	思考を促したり、焦点化したりする発問や問いかけがある。		
	14	子どもが互いに考えをつなぐための手だてがある。		
	15	一斉学習、グループ学習、個別学習等、学習形態の適切な組合せがある。		
	16	子ども相互が練り合い高め合う場を設けている。		
	17	個に応じた指導の場がある。		
	18	本時の評価規準や評価方法は適切である。		
	19	本時のまとめは、学習の振り返りと次時の見通しをもたせる等、適切である。		
その他	20	板書計画がある。		
	21	机列表（座席表）があり、本時につながる子どもの実態が書かれている。		
	22	指導案に誤字や脱字、読みにくい表現がない。		
	23	子どもの思考の展開を助ける掲示物、ワークシート等が準備されている。		
	24	()		
	25	()		

指導案チェックシートを開発する過程で、同僚の教師間で次のようなやりとりがあった。

①実際に指導案を作成するときに、どの項目から書き始めるかをめぐる論議が生じた。若い教師は、一単位時間の展開案から書き始める傾向があり、ベテラン教師は、単元指導計画から書き始めることが多いと分かった。若い教師はまず本時のイメージをつくるのが先決であり、本時を軸として前の授業や後の授業をつなげて考えていく授業の仕組み方をする傾向が強いようである。一方、ベテラン教師は、単元を通じてつけたい力は何か、それは単元の入口からどのような授業を積み重ねていけばたどり着けるのかという思考を展開し、その途中に相当する本時でどのような授業をすればよいかという仕組み方の傾向を持っていた。つまり、若い教師は、部分から全体へ、ベテラン教師は全体から部分を考える傾向をもつことが分かったのである。

このやりとりは若い教師に大きな影響を与えるものとなった。ベテランの教師達は、自分も若いときに本時の展開案から書き始めたこと、しかし展開案に力を注ぐあまり、子どもの実態を忘れて、普段から隔たりのある特別な1時間の授業に仕立ててしまったこと、つまり、子どもの十分な学習の積み上げがないままに、本時をうまく展開しようとして、本時の計画と子どもの実態が乖離し、授業の失敗につながったこと等を話した。こうした談話を契機にして、若い教師は、一単位時間に重点を置きつつも、そこだけに視野を絞らないように、チェックシートで他の諸側面をチェックし、単元としての展開の在り方を考えることを心がけるようになったのである。

②指導案チェックシートをいかに活用するのか、その活用の仕方が話題となった。

- ・まずは、授業者が自分でこれらの項目を網羅した指導案を作成できたかを点検するために使うとよい。
- ・指導案を読むのは、子どもではなく同僚教師である。したがって、授業に対する考え方や方法が読み手に伝わらなければ意味がない。そこで、授業者に授業内容に関する説明を聞く前に、指導案のみを各自で読んで、これらのチェック項目に沿って明確に書かれているかを確認する作業が大切であろう。各自がチェックをし終わった後、十分でない部分から検討を始めたらどうか。そうすることで、時間を有効に使い、授業者にとって曖昧なところを重点的に話し合うことができる。このような意見交流から、シートの使い方を決めることができた。その他に、チェック欄を二列設けて、1回目不備があった部分を2回目のチェックで確認できるようにすること、24と25の欄に空白を設け、自分で項目を立てて書けるようにすること等の工夫を話し合い、実際のシートに反映させることができた。

これらの①と②のやりとりを踏まえた上で、指導案チェックシートが出来上がった。同僚との協働によって作成したこのチェックシートは、次年度以降も生かしていけるよう、ラウンドテーブルで絶えず見直しを図っていきたいと考えている。

(3) 授業観察シートの開発と活用

先述したように、授業観察シートを開発し、活用したいと考えた契機は、宇都宮大学教育学部附属中学校T教諭から受けた示唆による。同校の授業観察シートの内容と活用の仕方について説明する。

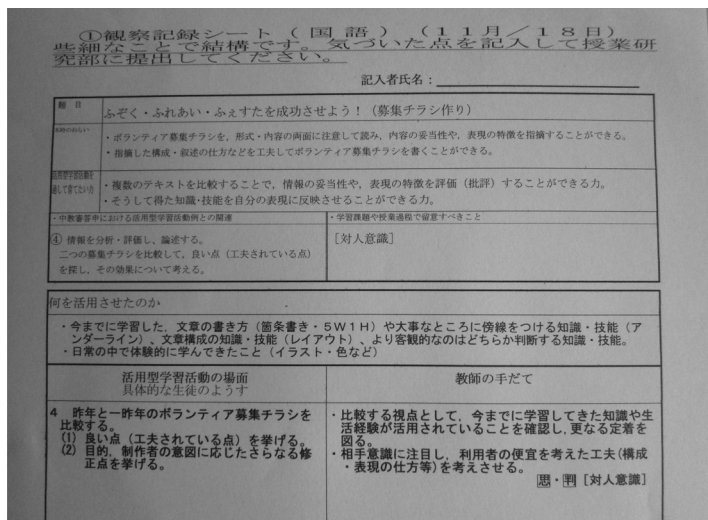
同校は、平成20年度から「新しい時代に対応した授業の在り方を考える一活用型学習活動の実践を通して」という研究主題の元で、習得した知識・技能を生きる力として活用できるものへと高められる学習活動に関する実践を蓄積してきた。中学校なので、各教科部が主体となって授業検討は進められているが、全職員が教科の枠をこえて、「活用型学習活動」について共通理解に努め、その上で、各教師が学習活動をいかに工夫したかを検討し、それに基づく生徒の学びや育ちの姿やその意味を共有しようとしている。T教諭によると、事前検討では、簡単な指導案が提出され、授業者から授業研究部に対して授業概要の説明がなされる。授業研究部は、学校の研究主題を踏まえて、「活用型学習活動」がどう位置付けられ、生徒にいかなる力がつくかを吟味する。その後、教科部に議論の場を移し、教科主任、授業者、研究主任が関わって「授業観察シート」を作成する。そこには次の項目がある。

題目（単元名）、本時のねらい、活用型学習活動を通して育てたい力、中教審答申における活用型学習活動例との関連、学習課題や授業過程で留意すべきこと、何を活用させたのか、活用型学習活動の場面（※具体的な生徒の様子を時系列でメモできる欄）、教師の手だて（※教師の働きかけを時系列でメモできる欄）、活用型学習活動が有効であった点、課題点、メモ

事前に分かっていることや授業者の主張点は予め記入され、参観者は授業を参観しながらシートに自分の気づきを記していく。参観後、研究主任はシートを回収し、同じ形式の1枚のシート上に、他の教師の気づきを重ねて記す作業を行う。放課後の研究会は、そのまとめられたシートを手がかりに討議する。参観者にとって、他の参観者の見方や考え方が一目瞭然で分かり、自分の気づきとの異同から、討議すべきことを理解し、討議に積極的に関わることができる。討議終了後、授業者自身の省察がシートに位置付けられて再び配付され、一つの授業に関するシートの一連の役割が終了する。

このシートを実際に長島小学校で活用していくに際して、改良したい点が幾つかあった。

- ①子どもの姿と教師の手だての二つの側面から授業を観察することに変わりはないが、参観者ができるだけ多くの気づきを書けるように、A3二つ折り（片面A4サイズ）として、見開きで授業全体を概観できるようにする。
- ②参観者が参観授業を自らの経験や授業に引き寄せて考えていけるように、「今回の授業で学ぼうと思っている点」という欄を最初に設けて、授業を参観する構えを意識的にもてるように工夫する。



宇都宮大学教育学部附属中学校の授業観察シート

- ③シートの最後に「今後の自分の授業につなげたいこと」を記す欄を設ける。授業を参観して、自分の日常の授業にどんなことを生かしていけそうか、自分の授業の何を改善していけばよいかと、授業者と自分を照らし合わせて考え、シートに記すことを通して、自己省察を図る。
- ④シートの中身をあえて全体としてまとめようとしない。労力をできるだけかけないというだけでなく、シートはあく

まで教師個人の気づきの足跡としたいからである。誰かがまとめることで、一人の教師の小さな気づきや、ある子どもに焦点を当てたりリアルで具体的な省察が、まとめる、要約するという操作を経る中で消えてしまう危険性があるからである。研究会を少人数化（ラウンドテーブルやワークショップ）すれば、討議するうちにその中心は焦点化していく。したがって、記述されたままのシートを見合いながら語り合う方がよいと考えたのである。また、討議を通じて感じ考えたことをシートに書き加えていくことが教師の力量形成にとって有効だと判断するためである。

以上の改良点を踏まえて、長島小学校の授業観察シートは次の項目から構成され、現在、授業参観で日常的に活用されている。作成者は研推コーディネーターであり、授業者との相談後に行っている。

- ・単元名、・本時の目標、話し合い活動の工夫（視点）（※長島小学校の研究主題に関わるもの）
- ・今回の授業を通して学ぼうと思っている点、・子どもの様子、・教師の手だて、指導や援助、
- ・メモ、・今後の自分の授業につなげたいこと

大きく違う。H教諭は項目全体に満遍なく自己の気付きを書き記しているのに対して、S教諭は「教師の手だて、指導や援助」（見開き左頁の右欄）は多く記しているが、「具体的な子どもの様子」（同頁の左欄）は十分につかみきれていない。

また、別の箇所を見ると、例えば、左頁上部に「今回の授業を通して学ぼうと思っている点」という欄がある。S教諭は、「でか版紙[®]の使い方、意見の集約の仕方」というように、授業の技法を学びたいと考えているのに対して、H教諭は「前時までの学習の中のどの言葉が子どもの説明に有効に結びついているか。考えの足場づくりとしてどのように子どもが掲示を活用しているか」というように、子どもの学びの連続性や子どもの表現の背景にある思考の変容に着目し、授業参観に臨もうとしている。授業への眼差しの構えが大きく異なることがわかる。

しかし、「今後の授業につなげたいこと」が記された見開き右頁の下欄を見ると、研究会を通して、若いS教諭が他の先生達の気付きや捉えを自分に積極的に引き寄せようとしていることがわかる。「今日の授業から自分につなげたいことは、子どもたちの考えや意見を大切にすることです。今日の授業では、出された意見のどれも否定するのではなく、良さを見つけ価値付けられていました。…自分が意図した意見ではなかったときに、普段のぼくはそれをどう扱っていいのか困り、子どもたちにかわいそうな思いをさせてしまっているなど感じました。…」研究会で子ども達の様子をめぐる同僚先輩教師の豊かな捉えに気付き、それをS教諭は自分の普段の授業づくりの状況に引き寄せて、自らの振舞いを省察できたのである。つまり、授業参観並びに研究会を通して、授業の技法を学べばそれでよいのではないと考えるようになり、「今後の授業につなげたいこと」の欄を記したのである。省察を書きとめておくことは重要である。時間の経過と共に薄らいでいく省察内容を、記録として目に見える形で保存することによって自己課題としてつねに意識できるからである。そうした意味で、授業観察シートの活用を継続することは、教師の力量形成に寄与するものとなるだろう。

また、同僚教師が授業観察シートの活用に対してどのような感想をもっているかについて、ラウンドテーブルでインタビューを行った。

- ・シートがあると、事前に自分なりの授業への考えとか思いを書いておかないといけないという緊張感がいい。(H)
- ・あらかじめ書いたり整理したりしておく、色々なことがはっきりしてきて、後で生かしていくことができると思う。自分の足りないものがわかる。(N)
- ・「この授業で学ぼうと思っている所」という欄が授業観察シートのはじめにあるが、この欄がいい。自分を問い直させられる。追込まれる。その分とても意味がある。授業を見る視点が明確になるだけでなく、授業の見方がシートを通してわかるようになる。(A)
- ・ただ授業を漠然と見るのではなく、どういうところに気を付けて見たらいいのかがわかる。(N)
- ・シートを見ながら、授業を観察していくと「ここでひっかかるやろな」「先生、どうするのかな」とか考える。そして「こうなるんか」「こうされるんか」とか気付き、自分だったら…と自分につなげて考えることができる。(S)

このように、同僚教師達が、授業観察シートというツールを介して、あらためて授業とは何かについて考えをめぐらせ、自分の実践を振り返って、日常の授業の改善に立ち向かうことができるようになったのではないだろうか。

(4) 思考の複線シートの開発

指導案の展開を構想するとき、私達教師は日常の授業での子どもの様子を思い浮かべようと努める。「A男は課題のこの部分にこだわってくるだろう」、「B子はすぐに図を使って考えをノートに書き始めるだろう」、「C男はこの問題に対して今まで学習していないやり方はないかと探し始めるだろう」等、教師の働きかけに対して、子どもがいかなる反応を示し、どのような考え方を表出するかを、普段の様子とつなげながら考える。一つの課題に対するイメージや考え方は子どもによって様々である

から、その後のアプローチの仕方も様々なものとなってくる。よって、私達教師は自分の予想にしたがって展開案を書き始めると、当然、幾通りも書かなければならないことに気付く。

授業の流れを整理し、1時間のまとめの段階に行き着くまでの教師の羅針盤としての展開案をどのように考えていけばよいの。渥美利夫によれば、展開案として指導案に計画を書く場合には、スペースを考慮し、少なくとも二通りは示すべきであるという。二通りといっても、スムーズな単線の授業の流れをとるのではない。複線化せざるを得ない、授業の流れの複線化について考えるための観点を幾つか示している。重要だと思われるものを3点挙げる。⁹⁾

- 授業の曲がり角、山場となるもの

本時の展開案を考える場合、山場（動的なものばかりとは限らない）、曲がり角（山場の外延にあって、山場を内包するもの）をどこにどのように予想していくかが重要な要素である。山場で子どもたちの活動を盛り上げるための手だてをどのように工夫し、指導案に盛り込むかが問題である。

- 評価のこと、見切り

その時間の評価をどこでどのような方法でしていくのか、だれがどのような反応を示した時に今まで進めてきた学習内容に見切りをつけ、次へ発展させるのかも教師のおさえとして予想を立てておくべき事柄である。

- 能力差に応ずる工夫

それぞれの子どもたちが自分の得意とする出場を見つけて活躍することを願い、いろいろな試みをするのであるが、みんなの活動の輪の中に加わることの出来ない子どもたちが生かされるような場面の設定、発言の質に関する教師の手だても考えておかなければならない。

いずれも外すことのできない重要なものであり、これまでも授業計画を立てる際に、意識してきたのではないだろうか。関連して、授業の「節目」、授業の「肝」、評価規準、個に応じた指導といった言葉が思い浮かぶ。他にも多くの観点があるだろうが、少なくともこの三つの観点を中核に据えれば、抽出児や時間配分のテーマも関連付けて登場してくることになる。そのことが、授業を重層的に考えることにつながっていく。

授業の事前検討に際して、指導案に位置付けられた授業展開案に対して、多くのことに気づき、意見を交流する。「この四角形の面積を求めよう」という課題に対して、子どもがどのような考えをつくらうとするかを、子どもの目線に立って予想しようとする。授業者は、等積変形をして考える子ども、倍積変形をして考える子ども、1マス1マス指で数えながら面積を捉える子どもがいると展開案に記されている。しかし、もしかしたらD子は何も考える手だてをもち下を向いて鉛筆が止まっているかもしれない。そうならば、ここでヒントを与える必要があると述べるA教諭がいる。頭で考えるだけでなく、実際にはさみで切って図形を操作する場があるとE男には分かりやすく、全体としても算数的活動が充実するのではないかという意見を述べるB教師がいる。こうして、同僚教師の様々な意見が事前検討の場では大いに交錯する。そして、ついに混乱してきて、1枚の用紙を取り出して、話し合いの場の中央に据えて、それまでの様々な意見を整理することが多くなってきた。その場合に大切なのは、四角で囲んだ数人の子ども達の考えを互いに線でつなぎ、次にどう発展し合うかを考えて書くようにすることである。現時点での相互の関連性だけでなく、今後の動的な展開も視野に入れて、子どもの思考の流れを複線的に示し、そこに教師がどう関与したらよいかを示す。流れの隙間の部分に、吹き出しを用いて教師の発問や問いかけの言葉、「ここでこうあってほしい」といった願いも書き入れていく。そして、この用紙を授業者は持ち帰って、自分の授業計画を再検討する重要な手掛かりとする。授業の流れを整理でき、かつ授業者自身が自分の授業の羅針盤として活用できること、これはとても意味ある活動である。筆者（西尾）は「思考の複線シート」と名づけ、子どもの思考を追うと共に、教師の思考や推察を育てるものとして位置付けたいと考えている。授業づくりの一方法としても大変有効であると判断している。

「思考の複線シート」の作成手順について、もう少し具体的に述べておく。

- ・事前検討の際に用いる。全員で一緒に考えて書く。
- ・A3サイズ以上の紙を用いる。（私達の間では、通称「でか版紙」）
- ・誰か一人の教師が代表して書き込む。他の教師は指差しながら、自分の考えを述べる。
- ・一番上に本時の目標を書く。
- ・本時の課題を上の方に、本時のまとめを下の方に書く。
- ・一番下には、評価規準を書く。
- ・まず、考えづくりの場面に着目する。登場するであろう子どもの思考の幾つかの型を推察し、相互の関連付けとその発展の在り様を書く
- ・次に、考えを交流する話し合いの場面に着目する。考えづくりの場面の枠と、話し合いの場面で発言してほしい内容との枠を線で結びながら、構造的に子どもの思考の流れを考えていくようにする。
- ・「山場」や授業の「肝」の場面を見つけ、そこにつながりうる子どもの考えはどれかを明確にする。
- ・重要な発言内容と、見切りをつけざるをえない発言内容との見極めをつけつつ、どの子どもの思考も藪の中に入っていないような配慮を考える。
- ・個に対する必要な手だてや教師の願いを隙間に書き加えていく。

このようなシートを教師が協働して作成するプロセスはワークショップやラウンドテーブルの考え方に相通じるものがあり、授業に潜む複雑さや面白さや奥深さを一層理解することにつながる。異なる世代の教師達が一緒に考えを出し合うことで、若い教師もベテラン教師も互いに学ぶところが大変大きい。今後、事前検討の場を中心に「思考の複線シート」をより活用していきたいと考えている。

(5) 授業研究ツールの課題と次につながる可能性

三つの授業研究ツールの開発と活用を通して、これらのツールが教師と授業をより強く結びつけるものであると改めて確認することができた。一人ひとりの教師がツールを活用した自己省察を経て、授業改善に向かうことができた。いずれにおいても、語り合い、書くという行為が教師の思考を対象化し、整理し、統合し、発展させることにつながっている。

今後の課題は、こうした教師の学びをより開かれた学びへと展開する工夫が一層必要だということである。ツールを活用して得た学びを、ラウンドテーブル等の場を通して、他の教師達に広げていくと共に、教師どうしが相互理解を深める手段として、ツールを生かしていきたい。例えば、若い教師が何に課題をもち、つまずき、悩んでいるかを、他の同僚教師は「指導案チェックシート」を窓口として探ることができるだろう。「授業観察シート」を元に話し合う中で、授業の同じ事象に着目しつつ、人によって違った捉えをしていることに気付き、そこから新しいものの見方や考え方が生まれるだろう。一人のベテラン教師が「思考の複線シート」に指差して語った内容がある若い教師にヒントを与えることもあるだろう。そうした協働の具体的な中身を作る手段としてツールを活用していきたい。

(注)

- (1) 西尾朋子・石川英志「日常の授業改善につながる校内授業研究の開発実践（その1）」『岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）』第14巻第1号 2012年
- (2) 佐古秀一「学級経営の力量を高める」藤岡完治・澤本和子編『授業で成長する教師』〈シリーズ・新しい授業を創る 第5巻〉ぎょうせい 1999年
- (3) 岩手県立総合教育センター「校内授業研究の進め方ガイドブック」
<http://www1.iwate-ed.jp/tantou/kyouka/seika/jugyouken/index.html>
- (4) 西尾朋子・石川英志「校内授業研究の現状と今後のビジョンの構築—全校研究会の在り方に焦点を当てて—」『岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）』第12巻 2010年

- (5) リフレクション・ファイルについては、紙幅の関係で次稿において取り上げる予定である。
- (6) 西尾朋子・石川英志「日常の授業改善につながる校内授業研究の開発実践 (その2)」『岐阜大学教育学部研究報告 (教育実践研究)』第14巻第2号 2012年
- (7) 高間邦男『学習する組織－現場に変化のタネをまく－』光文社 2005年 207ページ
- (8) でか版紙とは、A3サイズ以上の用紙の通称。
- (9) 渥美利夫・愛知県新城小学校『しゃべる授業から見守る授業へ』黎明書房 1986年 157-159ページ